

[図画工作・美術]

表現と鑑賞の一体化を目指した指導の工夫

五十嵐 実*

1 はじめに

『小学校学習指導要領解説』（平成11年5月）では、「働きかけ（表現）と働きかけられる（鑑賞）」¹）という文言に見られるように、鑑賞が受動的な活動と位置付けられていた。しかし、平成20年8月の解説では、「表現と鑑賞はそれぞれに独立して働くものではなく、お互いに働きかけたり、働きかけられながら、一体的に補い合って高まっていく活動である」²）と、鑑賞の捉えが変化している。この変化は当然のことと思われるが、今後、この表現と鑑賞の一体化について、実践研究を蓄積していく必要性を痛感するのである。

これまでの私も含めた学校現場では、表現と鑑賞の一体化をどのように捉えているのか、その捉え方の違いに疑問を感じることもある。「作品づくりの工夫や苦勞を振り返らせる」「表現技能に優れた作品を分析し、それらを参考にさせる」等で、「表現と鑑賞の一体化を図った」と安易に学習指導要領を捉えていた問題である。この問題で危惧されることは、「つくる」と「みる」が一問一答的な関係を有し、必要感に応じて情報を整理したり、ある情報を応用させて別の可能性を探ったりするような思考の機会が奪われていることである。

このような表現と鑑賞の一体化の軽視が子どもの造形的な思考力低下を招き、図画工作科が目指す創造性 (creativity) を育む機会も奪っているのではないだろうか。むしろ、私は、「つくる」と「みる」の行き来する表現と鑑賞の一体化を目指すことで、子どもにゆっくりと造形的な思考力を働かせる場面や手立てを生み出す可能性があると考えられる。更に、そのような可能性を追求することで、必要な情報を取捨選択しながら新しい表現・鑑賞の視点を見付けたり、試行錯誤をしながら新しい表現・鑑賞の方法を獲得したりする創造性を育むことができるのではないかと考える。

2 研究仮説

子どもが「みる」課題意識を持つことができる表現と「つくる」課題の解決方法を見付けることができる鑑賞を連続的に構成する表現と鑑賞の一体化を図れば、子どもは自分なりの対象の捉えや対象の比較検証をする造形的な思考力、構想の練り直しや情報の応用化を試みる造形的な思考力を働かせるようになるだろう。

3 研究の内容と方法

(1) 研究内容

1つの題材の中に、表現と鑑賞の一体化をどのように成立させるか検討し、その構造化を図る。その重要な視点として、①表現に働きかける鑑賞、②鑑賞に働きかける表現を考え、その相互的關係を目指すこととする。そして、そのような関係性を構築していくことで、子どもが情報を取捨選択したり、応用したりする造形的な思考力を働かせる過程を分析する。

① 表現に働きかける鑑賞

子どもがイメージの具現化に向けて制作を進める際、単なる思い付きで過去の造形的体験を繰り返すのではなく、構想を練り直したり、表現方法を試行錯誤したりするような造形的な思考力を働かせる契機となるような活動を取り入れる。その契機となる活動として、表現を止めて、情報を収集する鑑賞を設定する。尚、このような鑑賞を本研究では、作品完成後仲間同士でみる鑑賞に対してミニ鑑賞と呼ぶことにする。このミニ鑑賞では、「参考になる友達の表現方法」「友達の表現の特徴」の観点で仲間の作品を鑑賞し、それらの情報をB6サイズのミニスケッチブックに書き溜める活

* 長岡市立黒条小学校

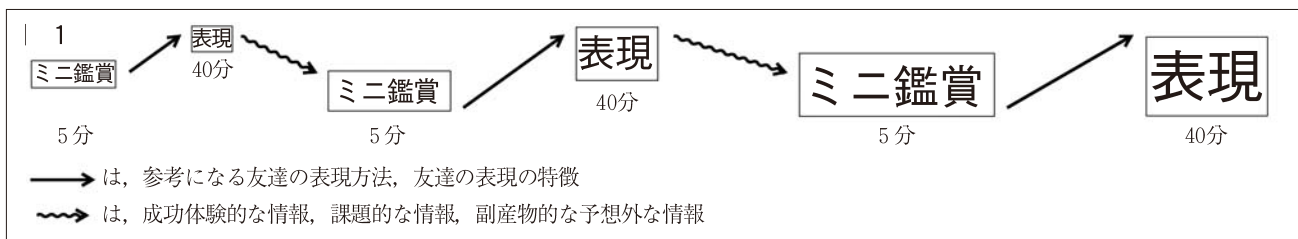
動を取り入れる。この活動によって、子どもが情報を取捨選択したり、自他の表現を比較検証したりするなどの造形的思考力を働かせることができると考える。また、ミニスケッチブックは、情報を書き溜める以外にも、着色の試し塗りをしながら自分自身の表現を鑑賞できる機能を持たせ、表現方法の試行錯誤を促す教材としても取り扱う。

② 鑑賞に働きかける表現

子どもが自分自身の制作で得た情報を基に、みる視点を焦点化したり、詳しく追求したりするような造形的な思考力を働かせる契機となるような活動を取り入れる。その契機となる活動として、上記で述べた①のミニ鑑賞後、制作の見通しを持たせる活動を設定する。この制作の見通しの場を設定することは、子どもがイメージを具現化するための視点を明確にし、自分の作品に対する特別な思いやこだわりを抱くことにつながると考える。また、そのような心情を抱くことは、制作において、成功体験的な情報、課題的な情報、副産物的な予想外の情報を蓄積することにつながり、ミニ鑑賞において、みる視点の広がりから対象を比較検証したり、表現で得た情報から他者の作品に対する理解を深めたりすることにつながると考える。

③ ①と②の活動の連続性

①と②のミニ鑑賞と表現を以下の図1のように連続的に取り入れて題材を構成し、表現と鑑賞の一体化を図る。作品の制作が始まってからそれが完成するまで、毎時間の始業5分間をミニ鑑賞の時間とする。ミニ鑑賞で得た情報を基に表現方法の取捨選択や試行錯誤をしながら表現をし、表現で得た情報を基に形や色の特徴を捉えながら鑑賞をすることで表現と鑑賞の活動が補い高め合うようにする。更に、これらの活動を連続させることで、表現、鑑賞の学びの情報を蓄積したり、それらを整理したりする行為を促し、表現、鑑賞の基礎的な能力を拡充していく。



(2) 検証方法

研究内容①では表現に至る思考の流れを、研究内容②では鑑賞に至る思考の流れを分析する。これらの分析では、抽出席のミニ鑑賞記録と制作途中の作品を比較しながら仮説検証をする。

4 実践：「平成21年黒条少年しかけの章～記憶は永遠に～」

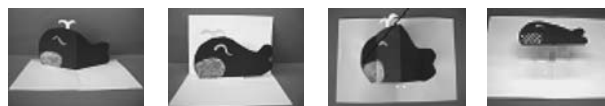
(1) 題材について

平成21年9月、妙高自然の家の野外体験学習で、秘密基地づくりをした。秘密基地づくり当日まで、ロープワークを管理士さんから教わったり、シンボルマークを考えたりする活動を取り入れ、当日は、仲間と協力しながら、山林に生えている樹木、落ち木、草等の自然物とロープを使って秘密基地づくりをした。この時の体験を作品に表現させたいと考えた。

また、題材名「平成21年黒条少年」は、「20世紀少年」(原作浦沢直樹)をモチーフにしたものである。クラスの半数以上が「20世紀少年」の漫画や映画を見ていた話題性、そのストーリーに「秘密基地」「シンボルマーク」づくりが組み込まれている類似性から、子供の興味関心を引き出したり、子供の感性を刺激したりすることができると考えた。

本題材は、仲間と作った秘密基地で強調したい部分を飛び出させる「絵本」を制作する。この題材の主なねらいは、形や色の特徴を捉えながら、秘密基地となるしかけとその背景となる絵本の風景を組み合わせることである。そのために、しかけと絵本に工夫を加える情報を収集することとそれらを具現化することを連続的に繰り返す表現と鑑賞の一体化を試みる。授業の流れは、まず、4種類の例示された絵本の型と(図2)、仲間と作った秘密基地のイメージを擦り合わせて、表してみたい型を1つ選び、構想を練ることができるようにする。次に、ミニ鑑賞で参考になる特徴を見付けたり、制作前に見通しを持ったりすることを繰り返して、漸次的に構想の具現化を図ることができるようにする。ここでは、ミニ鑑賞を

図2



180°スタンド型 90°スタンド型 180°山折り型 180°飛び出し型

することで、しかけと絵本それぞれの構図や着色のヒントになるものを見付けたり、一旦練り上げたしかけと絵本の構想を練り直したりする造形的な思考力が働くことを期待する。また、制作前の見通しを持つことで、作品に対する特別な思いやこだわりを抱き、共感や課題意識を持って仲間のしかけと絵本のそれぞれの構図や着色の特徴を分析したり、それらの着目する視点を広げたりする造形的な思考力が働くことも期待する。

以下、上記に述べた表現と鑑賞が互いに補い高め合うために働いた造形的な思考力が顕著に現れたA児とB児の例を記しながら、本実践を報告したい。

(2) 表現に働きかける鑑賞の実際

① A児の場合


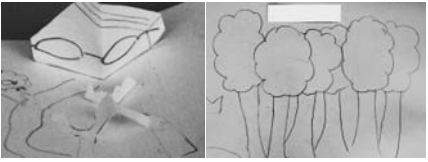
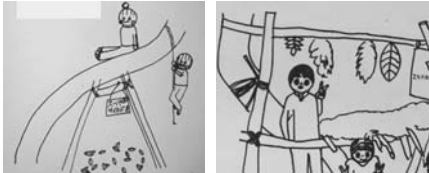
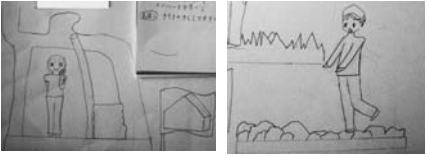
A児は、しかけをどのように飛び出させるか悩んでいた。11月26日のミニ鑑賞では、A児はC児の試しのしかけを鑑賞対象に選び、基地と木を別々に立たせているしかけの仕組みに気付いた。その日の制作では、その仕組みを参考にしながら、シンボルマークと草を180°スタンド型に、基地を180°山折り飛び出し型にし、それぞれを別々に立たせる試しのしかけを作った。更に、次の日の制作では、その試しのしかけの構造を基に、本番のしかけとなる基地、草、シンボルマーク、背景の大きな6本の木を描いた。

11月30日のミニ鑑賞では、A児はD児の試しのしかけを鑑賞対象に選び、基地のシンプルな感じのよさに気付いた。その日の制作では、しかけ作りの修正を試み、背景の大きな6本の木を消した。

12月1日のミニ鑑賞では、E児のしかけの下描きを鑑賞対象に選び、基地と木が一体化したしかけの構造や人体と基地の組み合わせの面白さに気付いた。その後、基地と人体を主体にするしかけ作りを構想し、制作を進めた。

12月4日のミニ鑑賞では、A児は、F児のしかけの下描きを鑑賞対象に選び、木の太さの変化や草のデフォルメに気付いた。その日の制作では、A児は、石の大きさに変化を付けたり、絵の具で塗りやすいように石をデフォルメしたりした。

上記のことから、A児は、ミニ鑑賞をすることで、構想のヒントを得たり、一度構想したものを練り直したりしながらイメージの具現化を図ることができたと考えられる。また、鑑賞対象の表現の特徴を応用させながら、自分の表現に工夫を加えることもできたと考えられる。

図3 A児の鑑賞対象	図4 A児のミニ鑑賞記録	図5 A児の制作の様子
 <p>C児の試しのしかけ D児の試しのしかけ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・180°スタンド型で基地の他に近くにある木も飛び出す。(C児) 11月26日 ・90°スタンド型基地 (D児) ○何か消したり描いたりする。11月30日 	 <p>11月26日時点 11月27日時点</p>
 <p>E児の下描き F児の下描き</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・基地と自分、そのほかに目立っている木などを一つにまとめて描く (E児) ・メンバーを全員描く (E児) ○基地を大きくして木を少なくする。12月1日 ・太い木は太く、葉っぱも絵の具で塗りやすいように大きく (F児) ○女子を基地と描いたら、男子をシンボルマークの所に描く。 12月4日 ・は、参考にした表現と特徴 ○は、見通し () 内は鑑賞対象者 	 <p>12月1日時点 12月4日時点</p>

② B児の場合


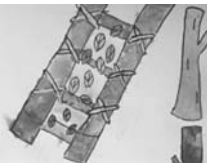







B児は、しかけの下描きが終わり、秘密基地の背景をどのようにするか考え始めていた。12月7日のミニ鑑賞では、B児は、G児の絵本の着色とH児のしかけの着色を鑑賞対象に選び、G児の空気遠近法を生かした着色の方法とH児の色彩の変化を用いた対象の目立たせ方に気付いた。その日の制作では、G児の空気遠近法に刺激を受けて、秘密基地の背景となる樹木の配置を工夫して遠近感を出した。遠くの樹木を画面上方に、近くの樹木を画面中央に配置した。また、12月16日の制作では、G児の空気遠近法そのものを参考にして、遠くの樹木を薄い茶色で、近くの樹木をそれより濃い茶色で着色した。このとき、B児は、近くの樹木をその手前にあるしかけとなる基地の茶色より薄く着色し、しかけと

背景を一体的に捉えて空気遠近法を利用した。

12月8日のミニ鑑賞では、B児は、I児の絵本の着色を鑑賞対象に選び、I児が薄い茶色、濃い茶色、焦げ茶色で木々を配色していることに気付いた。その日の制作では、B児は、I児の配色を参考にして、緑と黄緑で基地にぶら下がっている葉っぱを1枚1枚交互に配色した。更に、前回のミニ鑑賞で気付いたH児の対象を目立たせる着色方法を参考にしながら、形がはっきりしない葉っぱの塊を濃い黄緑と薄い黄緑で重色し、形がはっきりしている葉っぱを濃い緑と濃い黄緑で塗り分けた。

B児はその後の制作でも、過去のミニ鑑賞で気付いた表現方法を取り入れながら着色の工夫を重ねた。12月4日のミニ鑑賞では、B児は、E児の着色を鑑賞対象に選び、極端な濃淡の変化に気付いた。その着色の仕方を参考にして、12月9日の制作では、濃淡の変化を付けた茶色でX型に組んだものを、12月10日の制作では、同様に変化を付けた焦げ茶色ではしご型に組んだものを着色した。

上記のことから、B児はミニ鑑賞をすることで、ある一つの表現方法を応用したり、複数の表現方法を組み合わせたり、蓄積された過去の情報から制作の状況に合わせて必要なものを選んだりしながら、イメージの具現化を図ったと考えられる。

図6 B児の鑑賞対象	図7 B児のミニ鑑賞記録	図8 B児の制作の様子
 <p>G児の絵本着色</p>  <p>H児のしかけ着色</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・葉っぱの周りを黄緑にして、葉っぱの緑を目立たせている。(H児) ・木を太いものは濃く、細いものは薄く塗って遠近法を出している。(G児) ○絵本の後ろの木に遠近法が出るように描く。12月7日 	 <p>12月7日時点</p>  <p>12月16日時点</p>
 <p>I児の絵本着色</p>  <p>E児のしかけ着色</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・木の色を薄い茶、濃い茶だけでなく、焦げ茶も塗っている。ありの巢の森にあった木の色になるべく似ているように塗ったかっただと思う。(I児) ○色塗りに入って、葉っぱの色を少しずつ変えて、本物っぽくする。12月8日 	 <p>12月8日時点</p>  <p>12月9日時点</p>
	<ul style="list-style-type: none"> ・メンバーの名前を服に描いている。(J児) ・木の色をととも薄い色と濃い色に変えて、塗っている。(E児) ○メンバー2人を基地の外に立っているように描く。12月4日 	 <p>12月10日時点</p>

(3) 鑑賞に働きかける表現の実際

① A児の場合

A児は、11月27日までの試しのしかけ作りやしかけの下描きの段階で、しかけの構想を整理し切れていなかったことから、11月30日のミニ鑑賞では、飛び出す型の名称を記述するに留まった(図4)。ところが、A児は、(2)①で述べたように、D児のシンプルな秘密基地の構造から、しかけに付随したものを描いたり消したりする見通しを持ち、基地を主体にする構想を思い付いた。12月1日のミニ鑑賞では、A児は、基地を主体にするE児のしかけを鑑賞対象に選び、その仕組みが基地と木が一体化した構造であること、基地づくりのメンバーとなる人体をすべて登場させたことに気づき(図4)、更に木を少なくして基地を大きく見せる見通しを持った。

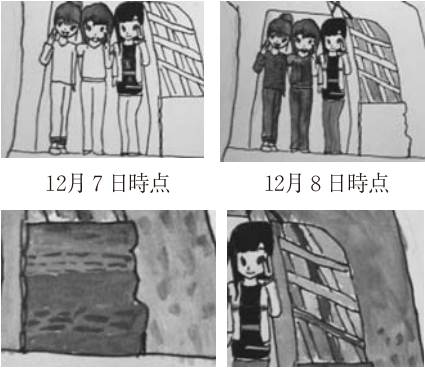

12月7日の後半の制作で、A児は、基地内にいる3人の人体(右側)を着色した。12月8日のミニ鑑賞では、A児は衣服の着色を前日に始めたことから、衣服の着色が進んでいるF児の作品を鑑賞対象にした。A児は、F児が口の形や衣服の配色に細かい変化を与えていたことに気付いた。

12月8日の制作では、A児は、F児の表現に刺激を受けて、衣服の着色に細かい変化を与える見通しを持った。A児は、真ん中の人体のズボンを薄い青と濃い青で、左側の人体のズボンを濃い黒と薄い黒で着色した。12月9日のミニ鑑賞では、K児の作品を鑑賞対象に選び、自分のズボンの着色を想起した。そこで、A児はK児の描いた木に濃淡の変化があることに気づき、更に、K児の筆跡で付けた模様面の面白さも感じ取った。

12月9日の制作では、A児は、基地の木を筆跡や重色で工夫をする見通しを持った。A児は、K児の濃淡や筆跡の残

し方を参考にしながら、筆跡を残して基地の右側にある幹を着色したり、丸太にちがう色を重色して模様を付けたりしていた。更に、茶色の混色を試しながら細い木の棒を着色した。12月10日のミニ鑑賞では、L児の作品を鑑賞対象に選び、自分の重色や混色を想起した。そこで、A児はL児の基地の微妙な色遣いに気付くことができた。L児は、水分を多めにして茶色と焦げ茶色の混色を繰り返して様々な木の色を作り、それらの色が響き合うように基地の木を1本1本着色した。A児は、その微妙な混色でできた色が赤を薄くしてつくられたものであると捉え、赤に近い茶色を認識することができた。

上記のことから、A児は、見通しを持って制作することで、制作の迷いを解消するためにみるポイントを定め、目的意識を持って作品を詳しく調べる行為に至ったと考えられる。そして、その見通しを持って制作することを繰り返す過程で、配色から筆跡へ、濃淡から微妙な混色へと着色の視点を広げ、自分なりの色の捉えもできたと考えられる。

図9 A児の制作の様子	図10 A児の鑑賞対象	図11 A児のミニ鑑賞記録
 <p>12月7日時点 12月8日時点</p> <p>12月9日時点 12月9日時点</p>	 <p>F児のしかけ着色 K児のしかけ着色</p> <p>L児のしかけ着色</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・メンバーの顔の表情や服装などが細かい (F児) ○女子の服を塗る。12月8日 ・葉っぱの形などは、ちょこちょこ細く (K児) ・木は薄い茶色に濃い茶色で点々で描く (K児) ○基地と木の色とできればシンボルマークの色塗りをする。12月9日 ・木は茶色だけでなく、赤を薄めた色も使う。(L児) ○男子の色塗りや草、石などを塗る。草は水を多めに使って、石は色を濃く水を少なめに筆の当て方を変えて。12月10日







② B児の場合

B児は、試しのしかけ作りが終えた時点で、飛び出す型を90°スタンド型にし、しかけとなる基地の形、絵本側に描く図柄等の構想も固まっていた。しかし、基地づくりの活動班の男子4人をどのようにレイアウトするか迷があった。B児は、その迷いを解消するために、12月1日のミニ鑑賞では、同じ活動班の女子のメンバーであったF児の作品を鑑賞対象にした。そこで、B児は、F児の女子を立たせ、男子を座らせるポーズの対比に気付いた。

12月1日の制作では、B児は、しかけの人体の配置とポーズに変化を与える見通しを持って、あらかじめ基地中央に立たせる3人目の女子(右側)とその人体の塊の左側に男の子の頭部を描いた。この時、B児は、F児の男子を座らせるポーズを参考にし、1人の男子を座ったポーズにするために、その頭部を隣となる女子の肩より低い位置に描いた。B児は、人体を単純に1列に並べるのではなく、何らかの 카테고리を設け、変化を与える構想を練ったと考えられる。12月2日のミニ鑑賞では、そのような構想を持ちながらL児とE児の作品を鑑賞対象にした。L児の下描きの構図を見て、基地内にいる者とそうでない者のカテゴリがあること、E児の下描きの構図を見て、遊んでいる者とそうでない者のカテゴリがあることに気付いた。

12月8日の制作では、B児は、葉っぱをリアルな表現にする見通しを持って、(2)②で述べたように、ぶら下がっている葉っぱを1枚1枚交互に配色したり、葉っぱの塊を濃淡の変化を付けた黄緑で重色したりした(図8)。また、12月9日の制作では、茶色の使い方や筆先の向きに見通しを持って、(2)②で述べたように、X型に組んだものを濃淡を付けて着色し、12月10日の制作では、余白を意識して焦げ茶色で着色する見通しを持って、(2)②で述べたように、はしご型に組んだものを濃淡を付けて着色した(図8)。12月15日のミニ鑑賞では、M児の作品を鑑賞対象に選び、M児が薄い茶色、濃い茶色、黄土色の3色で1本の木を配色していることに気付いた。B児は、自分のはしご型やX型の着色に用いた方法とM児の樹木の着色に用いた方法が似ていたことに注目することで、M児の微妙な3色の配色に気付くことができた。

上記のことから、B児は、見通しを持って制作することで、自分の課題に合った作品を対象を選び、多様な捉え方で作品をみる行為に至ったと考えられる。そして、見通しを持って制作を繰り返す過程で、自分と他者を比較しながら、ある部分の微妙な配色の変化に対して、着色の視点を広げることができたと考えられる。

図12 B児の制作の様子	図13 B児の鑑賞対象	図14 B児のミニ鑑賞記録
 <p>11月30日 時点</p>	 <p>F児のしかけ構図</p>  <p>L児のしかけ構図</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・立っている人、座っている人の両方を描いている。(F児) ○しかけの人(メンバー)を場所・動きを考えて描く。12月1日
 <p>12月1日 時点</p>	 <p>E児のしかけ構図</p>  <p>M児のしかけ着色</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・基地の中にメンバーを入れている。(L児) <ul style="list-style-type: none"> ・人を基地で遊んでいる人みんなで並んでいる人に分けている。(E児) ○メンバーを2人は描くようにする。12月2日 ・1本の木に濃い茶色、薄い茶色、黄土色の3色を使って木の感じを出している。(M児) ○ズボンの色をデニムのように水加減・筆の向き(縦)を考えて塗る。12月15日

5 成果と課題

(1) 表現に働きかける鑑賞の実際から

A児、B児の両者は、3次元の塊を2次元と3次元の要素を持った飛び出す絵本に再構成する難しさを感じていたが、ミニ鑑賞を繰り返した活動で、その難しさを克服することができた。A児は飛び出す仕組みを理解することができ、B児はしかけとその背景の関係を理解することができ、それぞれ、イメージの具現化を図ることができた。また、ミニ鑑賞を繰り返した活動は、飛び出す絵本の構造を理解させることに留まらず、制作そのものに対する考えを深めさせた。両者ともに、仲間のすぐれた表現方法を取り入れ、作品に改良を加えていた。A児は、しかけの形や飛び出し方で試行錯誤を繰り返し、B児は空気遠近法や配色の工夫で仲間の表現方法を応用し、思考を働かせながら制作を進めていた。

しかし、制作を止めて思考する時間が長くなったこと、試行錯誤をする機会が増えたことで時数がかさむ題材となった。それらの活動の長さを想定した指導計画を立てたり、作品の大きさを縮小したりする改善が必要である。

(2) 鑑賞に働きかける表現の実際から

A児、B児の両者は、制作の見通しを持って表現活動をしたことで、みる視点を焦点化することができた。A児は飛び出すものを何にするか、B児は人体の配置とポーズをどのようにするか、それぞれ制作で自問自答し、その時点で考えついたことを確かめるように仲間の作品をみることを繰り返した。また、制作の見通しを持ったことは、みる視点を広げさせることにもつながった。A児は、ある一つの着色方法を見付け、それを制作に取り入れることで、着色の面白さを実感し、更に、違う着色方法がないか新たな可能性を探っていた。B児は、自分の着色表現と似た鑑賞対象を見付け、更に、それと自分の着色表現と比較検証したことで微妙な配色を捉えることができた。両者ともに、思考を働かせながら鑑賞対象をみることができた。

しかし、他の子どもの中には、制作の見通しとみる視点がずれていた姿も見られた。表現後の振り返りや次時の見通しを持たせたり、ミニ鑑賞前に前時の表現を振り返ったりする等、一人一人への働きかけが更に必要となる。

この研究を通して、「つくる」と「みる」が連続的に展開しながら互いの能力を高め合う表現と鑑賞の一体化について、具体的な構造に基づく実践を行うことができた。今後も、子ども自らが、新しい表現・鑑賞の視点を見付けたり、新しい表現・鑑賞の方法を獲得したりできるような表現と鑑賞の一体化を目指し、子どもが常に「つくる」「みる」の造形的な思考力を働かせ、創造性を発揮できるような実践を重ねていきたい。

参考・引用文献

- 1) 学習指導要領解説図画工作編 平成11年5月 文部省 p.8
- 2) 学習指導要領解説図画工作編 平成20年8月 文部科学省 pp. P6-7